

餅の的

(風土記から)

東京女子高等師範學校教諭兼教授

石井庄司

三三

秋の收穫が終るに、農民はまづ今年のお米で餅を搗き、神に供へ、そして自分等も舌鼓を打つて、一年間の勞苦を忘れるのである。神棚に供へられた白々とした餅の姿は、さんなに彼等の目に快く映るこゝであらう。餅は全く神聖なものである。粒々みな辛苦から成るお米を、農民は如何に大切にするか。これは都會生活者、米の消費者にはちよつと理解できない位である。「眼がつぶれる」「罰が當る」「勿體ない」といつて、一粒の米をも無駄にしないといふ本能的な有様は、全く涙ぐましいものである。この心持は、誰にも味はつてもらひたいと思ふ。

山本有三氏が子供の友に書かれたものの中に「みなさんは米粒を見たこゝがありますか。毎日、毎日、けふのご飯はかたいの、やはらかいの、うまいの、まづいのこ、勝手なこゝをいつて食べてゐますが、一粒の米をほんたうに見たこゝはないでせう。一度手の平にのせてよく見てごらんなきい」といふ言葉がある。子供にもお米こゝいふものを、

しつかり見せておきたい。

豊葦原の瑞穂の國に稱せられる、我が國にはお米を大事にする話が古くから傳はつてゐる。それは「餅の的」の話である。豊後國風土記、田野の條に左のやうな記事が見える。

「この野は廣く大きに、土地沃腴えたり。開墾の便、この土に比ふものなし、昔者、郡内の百姓、この野に居りて多く水田を開き、糧を餘して畝に宿め、已だ富みて大く奢り、餅を作りて的を爲しき。時に餅、白鳥さ化りて發ちて南に飛びき。當年の間に、百姓死に絶えて、水田を造らず、遂に荒れ廢てたりき。時より以降、水田に宜からず、今、田野さいへるはその緣なり」。

著者が不明で、文永・弘安の頃の作と言はれてゐる考證的雜筆「塵袋」には、此の話は次のやうに傳へられてゐる。

「年始ニハ人ゴト餅ヲ賞翫スルハ何ニノ心アルカ。餅ハ福ノモノナレバ祝ニ用フル歟。昔、豊後國球珠郡ニヒロキ野ノアル所ニ、大分郡ニスム人、ソノ野ニキタリテ、家ツクリ田ツクリテスミケリ。アリツキテ家トミ、タノ

シカリケリ。酒ノミアソビケルニ、トリアヘズ司ナイケルニ、マトノナカリケルニヤ、餅ヲク、リテ的ニシテイケルホドニ、ソノ餅白キ鳥トナリテ、トビサリニケリ。ソレヨリ後、次第ニオトロヘテ、マドヒウセニケリ。アトハムナシキ野ニナリタリケルヲ、天、平年中ニ速見郡ニスミケル訓邇ト云ケル人、サシモヨクニギハヒタリシ所ノアセニケルヲ、アタラシトヤ思ヒケン、又コ、ニワタリテ、田ヲツクリタリケルホドニ、ソノ苗ミナカレウセケレバ、オドロキオソレテ、又モツクラズ、ステニケリト云ヘル事アリ。餅ハ福ノ源ナレバ、福神サリニケル故ニ、オトロヘケルニコソ。……」

(日本古典全集本、第九、六一二頁—六一四頁)

風土記の原文ミは聊か違つたところもあるが、まづ風土記に據つて敷衍したものミ思はれる。要するに全く同一の傳説である。

右に對して、神名帳頭註、或は諸社根元記等に引用されてゐる山城風土記の逸文に、稻荷神社の縁起として、次の如き傳説がある。

「山城風土記に曰く、伊奈利の社、いなりミ稱へるは、はたのなかついへのいから秦、とほつちやいろう中家忌寸等が遠祖伊侶具の秦公稻梁を積みて富裕を有らき。すなはち、餅を的ミ爲ししかば、白鳥ミ化成りて、飛び翔りて山の峰に居り、稻なり生ひき。遂に社

の名ミ爲しき。その苗裔に至り、先の過を悔いて、社の木を抜にして家に殖ゑて禱み祭りき。今その木を殖ゑて蘇きば福を得、その木を殖ゑて枯れば福あらじとす。』
いづれも富み榮えてゐた者が、餅を的にして射た爲めに、白鳥ミなつて飛び去り、後に不幸を招くさいふ筋のやうである、これは餅を神聖なものとし、米を大切に取扱ふさいふ精神のあらはれのやうである。これを子供にわからせるにはさうすればよいか。まづ大體の話の筋を立てて見よう。

二

むかしむかし、一人の若者がありました。自分で耕して、自分で作つて、暮を立てたいと思つて、方々さがして歩きましました。

山を越え、野原を越えて、ずつこ向ふに行きます。廣々としたよい土地が見つかりました。そこで若者はせつせと野原を耕して、田圃をこしらへ、そこで稻を作ることにしました。

苗代さいふ田圃へ、稻の種をポロポロさまきます。稻は水が好きですから、晝間は乾して、夜には水を溜めておきます。するさ青々としたかはい、稻の苗が出来ます。それをもつと廣い田圃へ植ゑかへます、これを田植さいひます。夏の暑い日がカンカン照りつけるやうな日でも、若者は田圃に出て、稻の世話をしてやります。稻はぐんぐん大

きくなつて、葉を出し、花が咲いて、涼しい風が吹く秋の頃になります。稲は實がなつて、すっかり金色になります。それを刈りこつて、藁からもぎこり、粗こします。それをよく日に乾して、それから臼にかけてゴロゴロゴロ引きます。きれいなお米になります。

皆さんは、お米をみたこがありますか。小さい小さいお米ですが、長い間苦勞を重ねなければ、手に入れることの出来ない大事なものです。

さて此の若者は、廣い田圃を耕して、お米を澤山取入れることが出来ました。それをきいて、あちらからもこちらからも、人が集つてきて、みんな心を合はせて、一生懸命に働きました。若者は初めて、此の村を開いたので、村長さんになりました。そして、お家はぎんぐお金持になりました。

その中に、此の若者の村長さんは、年をこつて来るころ、段々働かなくなりました。そして毎日お酒を飲んで遊んでばかりゐました。

この村長さんは、大變弓を射るこことが上手で、誰にでも負けないといつて自慢をしてゐました。

或日のこ、大勢の人々がお酒盛をしてゐましたが、弓を射るここになりました。

「自分は上手だから、何でも射て見せる」こ大威張に威張

つてゐました。そして神様にお供へしてあつたお餅をこつてきて、的にするこにしました、白い白いお餅です。それを的にして、村長さんはひやうこ自慢の矢を放しました。ぶすりこ、矢はうまく餅の真中にささりました。

するこ、そのこたんに餅は忽ち白い鳥にかはつて、バタバタ羽ばたきをして、空高く舞ひ上り、すつこ南の方へ飛んで行きました。村の人々は、その様子を見て、びつくりして、物もいふこが出来ませんでした。

それからいふものは、此の村の田や畑に蒔いた種は一つも芽が出来ません。稲を作つてもお米ができません、お甘藷を作つても何も出来ません。そこでお金持だつた村長さんのお家もだんぐ貧乏になりました。村中の人々がみなお米がたべられなくなつて困つてしまひました。

附記 話は簡単であるが、稲作といふことの困難さをいくらかでも理解させるため、初めにさういふ説明的敘述を加へることとした。話の筋は、主として豊後國風土記のものに據ることとした。甚だ富み、奢りになつたといふことで、奇蹟が湧き起るといふやうにしてみた。しかもあまり原因結果にすると、悪くなるから考慮を要する。なほ原文では、百姓が死に絶えるどあるが、これでは餘り殘酷に過ぎるので、稲が出来なかつたといふのに止めた。それで米がたべられなくて困つてゐるといふだけで、それから先は穿鑿しない方がよからうと思ふ。